

# 文人たちの宴「以德酔人、勝於以酒」

## ——1763～4（宝暦 13～明和元）年の通信使行——

高橋博巳

### 1

朝鮮通信使の応接も回を重ねるごとに成熟度を増してはいたが、江戸までの使行はこれが最後となった 1763～4 年の 11 回目には、様々に注目を引く記録がのこされているうち、まず『金鶏雑話』中巻の記述から見てゆこう。著者は菰野藩儒の南川金鶏（1732～81）である。

信使ノ吾国ニ来ル、対馬ヨリ東都マデ、往来トモニ道中并ニ賓館ニ於テノモテナシ、大ニ厚重ナル事ナレドモ、今ニテハ只吾国同土ノ外見バカリノヤフニナリテ、カノ国ノ人ノ心ニハ、カホドノ奔走トハ思ハザルコト多シト見ユ。大坂・江戸ノ客館又道中ニテ、毎夜ノ旅館ニテモ手寄ノ諸侯ニ命ジテ、其事ヲ主<sup>つかさ</sup>トラシムル事ニテ、ソノ諸侯方ニハ何レトモニ前々ノ記録アリ。因テ大小ノ事、瑣細ノ事マデモヤ、モスレバ先例ヲ引キ、一トシテ時ノ宜キニ従フコトナシ。譬ヘバ諸学士ノ席ヘハ、先例蠟燭三條ナレバ、夜話長クナリテ燭尽レドモ、三條ノ外ニ再ビ出スコトナシ。乞ヘバ「先例三條也」ト答フ。是等ノ事、カノ国ノ人ノ心ニハ大ニ快カラザルコト也。コノ外ノ事モ大旨カクノ如キノ類多ク見ヘタリ。故ニ帰国ノ時、江州守山ノ旅館ニテ、副使ノ書記玄川、魯堂ニ語テ曰、「入貴国以来先例之二字喧耳」トゾ。聖人ノ政ハ礼ト法トヲ定テコレヲ行ヒ、猶便宜ニモ従フコトナルニ、今ノ世ノ政事ニハ礼ニモ非ズ法ニモ非ズ、何トナク一度仕初メタルコトヲ先格トテ堅ク守ルハ、文盲ナルコトナリ。

（『随筆百花苑』5、中央公論社）

副使書記元玄川（1719～90）からこう聞かされた那波魯堂（1727～89）は、通信使に従って東海道を往復し『東遊篇』を残しているが、詩文の唱酬を中心とするこの書にそのような言及はない。<sup>1</sup>「貴国に入りて以来、先例の二字、耳に喧<sup>かまびす</sup>し」という玄川の言葉にふれて記された、「聖人ノ政…」以下の南川金鶏のコメントは蔓延していた「先例」主義を痛烈に批判している。「先例」に捕らわれて「一トシテ時ノ宜キニ従」おうとしない硬直した姿勢はこのときに限ったことではないが、「蠟

<sup>1</sup> 拙稿「元重挙一特立独行の人―」（『金城学院大学論集（人文学編）』6-2、2010年）を参照。

燭」の本数のような些事はともかくも、「コノ外ノ事モ大旨カクノ如キ」であったとすれば、「先例」病も深刻だったわけである。「礼・法」に依らず、ひたすら「何トナク一度仕初メタル」慣例を墨守していたのは、いかにも「文盲」無学と言わざるを得ないが、そのような状況をかろうじて救ったのが、各地の客館で通信使一行と応接した儒者や文人たちだった。その一端を以下、かいま見ることにしよう。

## 2

たとえば赤間関における長州藩の歓迎振りは、『長門癸甲問槎』四巻によってつぶさに窺うことができる。型どおりの自己紹介のあとで、滝鶴台（1709～73）は次のような詩を製述官の南玉（1722～70）に贈っている。玉は名で、字は時韞、秋月はその号。

呈製述官南秋月	製述官南秋月に呈す
共知学士早登瀛	共に知る 学士早く瀛に登るを
詞賦兼将経術明	詞賦 兼ねて経術を將つて明かなり
辞命今来誰潤色	辞命 今来 誰か潤色せん
寧令東里独専名	寧んぞ東里をして独り名を専らにせしめんや

「瀛」は海。「辞命」は外交交渉における言葉遣い。『論語』憲問篇に、

命を為るに卑謹<sup>ひじん</sup>之れを草創し、世叔<sup>しじく</sup>之れを討論し、行人<sup>しんじん</sup>子羽<sup>しよ</sup>之れを修飾し、東里の子産<sup>しよん</sup>之れを潤色す。

とあるのによって、「卑謹」以下の四人はいずれも鄭の家老であるが、そのなかでわけでも外交文書の潤色者として知られる「東里」の子産だけに評判を独り占めさせておく手はないでしょうと、水を向けたわけである。これに対する秋月の答えは次のとおり。

和滝鶴台瓊投	滝鶴台の瓊投に和す
愁風愁水泛重瀛	風を愁い水を愁えて 重瀛に泛ぶ
赤間関頭眼忽明	赤間関頭 眼忽ち明かなり
不待門前修孔刺	待たず 門前に孔刺を修するを
亀郎先誦斗南名	亀郎 先ず誦す 斗南の名

「重瀛」は深い海。当時の航海は風待ちなど、いろいろと気を使わなければならぬことが多かった。刺を通じる必要がなかったのは、先に筑前藍島で面会した「亀

郎」こと亀井南冥（1743～1814）が、すでに鶴台のことを当世の逸材として通信使一行に紹介していたからである。「斗南」は北斗以南で、この分野の第一人者として鶴台を紹介したことを指す。ちなみに南冥は通信使一行から高く評価され、その「異才」ぶりが通信使一行の日本に対する先入観を変えたといっても過言ではない。福岡での応接は到着直後の面会となるだけに、その第一印象は非常に重要である。ところで、ひとしきり応酬が続いたあとの「筆語」で、秋月が尋ねる。

古人謂わく、「一日の話は十年の読に勝る」と。詩は則ち余事。願わくは筆を以て舌に代え、言外の契を相道わん。盛名已に悉す。貴庚と幽居と、願わくは詳かに之れを聞かん。

この「一日の話は十年の読に勝る」という言葉は『後村集』巻百二十五に引く汪守の「一夜話勝十年書」に拠るものであろうが、これは先に藍島で南冥が李彦瑱（1740～66）に告げた言葉でもあった（『泱泱余響』、『亀井南冥昭陽全集』1、葦書房）。「貴庚」は相手の年齢を敬っていう場合に使われる。鶴台が答える。

筆に憑りて心を論ず、固より願う所なり。諸詩の高和、何ぞ必ずしも限るに今日を以てせんや。

驢年五十有五。敝居は本州の府城に在り。此こを距つること二百里。僕、連年役を東都に祇しむ。夏五月、国に帰り、孟冬又た此こに来たり、以て大旆の至るを俟つ。東西奔走して、寧居に遑あらざるのみ。

「驢年」の驢は謙遜の意で、馬齢と同義。「孟冬」は冬の初めの十月。「大旆」は、通信使一行が掲げる末端に燕尾状の飾りのついた旗。すると秋月が重ねて「盛什も亦た当に奉和すべし。而して閑閑に塵を揮わん。清談は更に佳なり」という。「塵」は払子のことで、これを揮いながら清談をした。詩文の唱和もさることながら、「清談」もどうですかという誘いを受けて、鶴台がいう。

盛意謹みて領す。但だ恨む、諸君の此の行、酒を禁ず。僕輩、既酔の詩を賦することを得ず。歎ず可し。

これに対する秋月の答えは、

徳を以て人を酔わしむるは、酒を以てするに勝る。

という見事なもので、この一句は両国儒学の位相の違いを期せずして浮かび上がらせることとなった。これは「酒」を飲む飲まないのレベルをはるかに超えて、もっ

と肝要な品位や人間性を問題にしているからである。しかもそれをさりげない挨拶の片言隻句で言い果せたところに秋月の面目があった。

これに対して鶴台の受け答えで注目されるのは、ユーモアの感覚である。帰途の筆談で、鶴台が「暑に当たりて重衣、熱を加えざるや否や」と尋ねると、秋月の答えは「幸いに瘦骨、熱を<sup>おそ</sup>恐れず」というものだった。すると鶴台はすかさず、

僕、肉猪の如し。所謂る汗淋学士なり。 (巻二)

という冗句でもって応じた。翰林学士と汗水博士との落差は一場の微苦笑を誘ったであろうが、それによってその場の雰囲気や和んだか、はたまた暑苦しさが増したかは定かでない。

それにしても「徳を以て人を酔わしむる」というのは、咄嗟に口をついて出る類の言葉ではない。日ごろの徳の涵養を想像させる言葉であるが、上田秋成（1734～1809）の、

大坂の御堂へちよと贈和に出た事があつた。秋月・竜淵といふ二人の外は、下郎じやあつた。

（『胆大小心録』61、『上田秋成集』日本古典学大系 27、岩波書店、1959年）

という周知のコメントは有力な裏付けとなる。また北学派の人々の言説を見てゆくと、似たような趣旨の文章を読むことができる。たとえば李徳懋（1741～93）が書簡のなかで、

凡そ友を取るの道は、先に其の品を看て、後に其の材を看る。  
(『青莊館全書』十九)

と述べているのもその一例である。能力や才能よりも「品」が優先されるところに「徳」を尊ぶのと同じ心性が看取される。

また朴齊家（1750～1805）の「冷斎寮友に次韻す 四首」の第三には、

文章係人品      文章は人品に係わる  
寧復論時代      寧んぞ復た時代を論ぜんや      (『貞菴閣集』二)

というような表現がある。齊家もまた「冷斎」柳得恭（1748～1807）らと切磋琢磨しながら、「文章」修業の前に「人品」の陶冶に励んでいたことが知られる。してみると、先の南玉の言葉はそれほど突出したものではなかったかもしれない。

3

さて正使書記として随行していた成大中（1732～1809）号、竜淵は、鶴台に次のように語りかけている。<sup>2</sup>

亀井魯は海外の異才なり。僕、之れに因りて足下を知る。方は類を以て聚り、物は群を以て分かる。足下の存する所、庶くは以て諒測す可し。蘭玉<sup>はな</sup>絶はだ愛す可し。公父子の間に遊ぶは、僕輩の幸なり。

「方は類を以て聚り、物は群を以て分かる」は『易』繫辞上傳の言葉。「善い方向に向かうものは、善いもの同志集まり、...すべてよいものはよいものばかり、悪いものは悪いものばかり、群をなして分かれる」（本田済訳、中国古典選1、476頁、朝日新聞社）ものなので、おのずから鶴台の位置も明らかに知られるというのである。「蘭玉」は他人の子弟をほめる言い方。鶴台が伴っていた子供の鴻（字、士儀）を指す。そして、言葉を継いでいう。

天下の大文字を看尽し、天下の大山水に遊び尽くし、天下の大人物に関し  
尽くして、方に人世了債の人と為る、足下能く幾分を了得するや否や。

「了債」は借りを返すこと。見るべきは、世界の大書物・大風景・大人物である。この大中の希望も彦瑱が南冥に語った「天下」の「奇書・佳士・名山水」を見たいという「三大願」と一致している。これらをあなたはどれだけ見尽くしたかという問いかけに、鶴台が答える。

僕、少きより学を好み、遊を好む。而るに薄官に羈せられ、素志を遂ぐることを得ず。然りと雖も、東のかた東都・平安に遊び、西のかた長崎に遊んで、海内の名勝は粗ぼ経遊を得たり。海内の知名も粗ぼ交遊を得たり。又た清国の人物・荷蘭諸国の人に接見す。今又た諸君に邂逅することを得たり。何の憾みか之れ有らん。但だ未だ博く群籍を窮むることを得ざるのみ。

この鶴台の東都から長崎に及ぶ見聞の範囲は、当時の藩儒として格別というほどではないにしても、「海内の知名」のみならず、「清国」「荷蘭諸国」の人々とも「接見」したことがあるというのは、鶴台の関心の広さを窺わせるに十分である。

そして鶴台が尋ねる。

<sup>2</sup> 拙稿「成大中の肖像—正使書記から中隠へ—」（同上、5-1、2008年）、および鄭珉氏にも『成大中処世語録』（푸르메、2009年）がある。

昨今、仄かに諸公の大作を微吟するを聞く。其の声、和雅にして愛す可し。  
請う、朗吟一過、以て客愁を泄し、且つは僕輩をして之れを聴くことを得しめば、所謂る俗耳の鍼砭、詩腸の鼓吹ならん。如何。

すると竜淵は、「謹みて厚意を領す。僕則ち之れを唱えん。公其れ和せよ」と応じた。鶴台が「音韻の殊なる、安んぞ能く和することを得ん」と案ずるのに対して、竜淵が次のように応じているのが注目される。

言外の意、心中の声、両唱迭和すれば、妨げず、同を異に求むるを。

ここには「言外の意、心中の声」を「音韻」の表面的な違いを超えて探ろうとする姿勢が示されている。そこで、玄川が七律を高吟し、竜淵も絶句二首を吟じたのを聞いて、鶴台はいう。

流暢円転、大いに清国の音に似たり。真に俗耳の鍼砭なるかな。

「鍼砭」は針治療に使う石針のことで、転じていましめの意。これは「言外の意、心中の声」が以心伝心によって伝わった記録である。このあと二人は「共に喜ぶ、文明気運同じきを」（「呈竜淵」）といい、それを受けて「文明漸く啓く、大溟の東」（「和鶴台」）というように、相互に「文明」の下にある幸せを実感していた。ここに「東アジアの文芸共和国」を実現する足がかりがある。<sup>3</sup>

#### 4

そうこうしているうちに通信使の一行は急に江戸に向けて出発し、見送りもかなわなかった鶴台は「粟」と題して、次のようなやや長文にわたる質問を寄せている。適宜、改行しながら引用する。

凡そ天地の間、聖人の道、尚うる莫し。然りと雖も後世の儒者、道を以て己の私有と為し、同を標し異を伐ち、中国を貴び夷狄を賤しむを以て務めと為す。是れ其の識見の陋、天地の大を知らざる者なり。

蓋し貴邦・吾が邦、同じく東維に僻す。而るに貴国声教の隆んなる、民徳の醇き、四学人材を養い、帰厚の署を設け、養老の燕を賜い、奴僕も亦た三年の喪を行うことを許すが如き、古えの至徳の世と雖も、亦た此くの如

<sup>3</sup> 拙著『東アジアの文芸共和国』（新典社新書、2009年）参照。

きに過ぎざるのみ。吾が邦の人情風俗の美は、蓋し天性に出で、忠臣義士・孝子貞婦、比比として有り。奴婢、忠を尽くし、娼妓、節に死すの類も、亦た鮮なからず。

彼の中華は聖人の国にして、其の人の姦惡、蛮夷より甚だしき者有り。僕、明清律に於いて之れを見る。凡そ律条に載する所、姦騙凶惡の甚だしき者、皆な吾が邦の人の未だ嘗て知るに及ばざる所なり。又た和蘭の色を二にせず、国に乞食無きが如き、皆な中国の及ばざる所なり。且つ夫れ四目人の化、詩書礼樂の教、被及する所の者、貴邦・吾が邦・琉球・交趾の諸国のみ。

古より、西洋南蛮の舟舶、吾が長崎に来たる者、百二三十国、又た地球の図・坤輿外記を見て、諸を明清の会典・一統志に考うるに、其の載せざる所の者尚お多し。宇宙の大、邦域の多きこと、此くの如し。而して其の国、各おの其の国の道有りて、国治まり、民安らかなり。乾毒に婆羅門の法有り。釈氏の道と並び行わる。西洋に天主教有り。其の他、回回教・囉嘛法の如き者、諸国或いは皆な之れ有らん。夫れ作者七人、皆な開国の君なり。天に継いで極を立つる者なり。利用厚生之道を立て、成徳之道を立つるは、皆な天に代わり民を安んずる所以なり。国治まり、民安んずれば、又た復た何をか求めん。何ぞ必ずしも中国の独り貴にして、夷教の廃す可けんや。故に君子の道は器を成し、材を達し、以て安民の用に供す。其の志を得ざるや、天を楽しみ、命に安んじ、優遊歳を卒う。又た復た何をか求めん。故に世の己を信ぜざる者をして己を信ぜしめんと欲するは、夫の学を好まざる者をして学を好ましめんと欲するなり。時を知らず、勢いを揣らず、其の道を当世に施さんと欲し、閭閻として争弁し、人に勝つを好む者は、皆な天地の大を知らざる者なり。僕の見は此くの如し。高明、如何と以為うや。高明、前に尽三大の語有り。是を以て再び示教を請うのみ。

末尾に、「高明、前に尽三大の語有り」と見えるので、これは成大中に宛てたものと知られる。「東維」は東の隅。「四目」は四方の事物を観察すること。韓愈の「感春」詩第二には、「幸いに堯舜の四目を明らかにするに逢い、條理品彙、皆な宜しきを得」（『全唐詩』三三八）とある。「交趾」は現在のベトナム。「乾毒」は乾竺（インド）のことか。「坤輿外記」はベルギーのイエズス会士フェルディナンド・フェルビースト（中国名は南懷仁）が著した地理奇談書『坤輿外紀』であろう。「作者七人」は古代中国の制度を作った聖人。「閭閻」は『論語』郷党篇に「上大夫と云えば、閭閻如たり」とあるように、穏やかに是非を説明するさいに使われるが、ここではやや激しく言い争うことであろう。

ここには朝鮮および日本の文明化の様相が理想的に要約されている。朝鮮では「声教」が盛んで、「民徳」は厚く、その状態は「古えの至徳の世と雖も、亦た此くの

如きに過ぎざるのみ」というほどの完成度の高さを誇っているという。また日本の「人情風俗」の醇美なこと「天性」によるもので、「忠臣義士・孝子貞婦」は多く、「奴婢、忠を尽くし、娼妓、節に死す」ほどの国柄である。しかるに中国はといえば、もともと「聖人の国」であるにもかかわらず、「其の人の姦惡、蛮夷より甚だしき者有り」という有様で、これを西洋と比べても、「和蘭の色を二にせず、国に乞食無きが如き」すべて中国の及ばないところだとして、「詩書礼楽の教」が今に伝わるのは「貴邦・吾が邦・琉球・交趾の諸国のみ」と鶴台はいうのである。こうして「天地の大」という視点から「中国」の権威は相対化された。

このように「宇宙の大、邦域の多き」点に注目すれば、「中国」ひとりを高しとするわけにはいかなくなる。「其の国、各おの其の国の道有り」というわけで、「乾毒に婆羅門の法有り。釈氏の道と並び行わる。西洋に天主教有り。其の他、回回教・囉嘛法の如き者、諸国或いは皆な之れ有らん」という。「国治まり、民安んずれば」それで結構ではないか。「何ぞ必ずしも中国の独り貴にして、夷教の廃す可けんや」ということにならざるを得ない。大切なことは、「君子の道は器を成し、材を達し、以て安民の用に供す」ることである。あるいはまた「其の志を得ざるや、天を楽しみ、命に安んじ、優遊歳を卒う。又た復た何をか求めん」という境地にたどりつく。これが「天地の大を知」ることではないか。

こう尋ねられた成大中の「答」は次のとおり。

別副、論せらる。世儒の中国を貴びて夷狄を賤ずるを以て、小見陋識、天地聖人の道に異なると為す。此れ足下の志大に、眼空しうするの論なり。曲士をして口を<sup>きよ</sup>呿せしむるに足る。然れども窃かに謂う、天地至大にして、陽を先にして陰を後にせざること能わず。聖人至高にして、華を内にして夷を外にせざること能わず。其れ或いは中国にして其の行いを夷にすれば、則ち之れを夷狄にす。夷狄にして夏に変ずれば、則ち之れを中国にす。揚子の所謂る牆に在れば、則ち揮し、狄に在れば則ち進む、是れなり。苟も其の生まれて中国の外に在れば、陳良を慕いて、得可からず。中国の夷行なる者を指して曰く、是れ真に中国の夷狄に如かざるものと。夷狄の華行なる者を指して曰く、是れ真に夷狄の中国に賢ると。豈に本を揣り、末を斉しうするの言ならんや。但だ当に平心公察、是非を明らかにして、内外を弁ずべし。形勢の局する所の者は、自ら抜くことを得ずと雖も、趣向の本然る者は、当に以て自ら定むること有るべし。鶴台の見識超邁、必ず<sup>れいぜん</sup>犁然たる者有らん。

「呿」は口をあぐりと開けること。「曲士」は学識の狭い人。「牆に在れば則ち揮し、狄に在れば則ち進む」の出典は不詳。「揚子」は揚雄（前 53～後 18）か。「陳良」は楚に生まれ、周公・仲尼の道を悦んで、いわゆる先王の道を修めた「豪



傑の士」（『孟子』滕文公篇）。『孟子』の同条では「今や南蛮馱舌の人、先王の道を非る」という言葉が続いているので、華夷の区別を問題にしているこの条には相応しい挙例となろう。文明国中国でたまたま蛮行が行われたとしても、それで中国が夷狄に墮したということとはできない。はっきりと「本を揣り、末を斉しう」して、「是非を明らかにして、内外を弁」じることが大切である。これが成大中の姿勢だった。「小中華」をもって任じる李朝の儒者としては当然の意見表明だったであろう。「犁然」は、はっきり見抜くこと。

## 5

もちろん、誰しも望めば通信使に面会できたわけではない。面会を望んで叶わなかった人物に野村東皐（1717～84）がいた。「種元民に与う」にいう。

朝鮮の信使、二月既望を以て都に入る。廿七日、朝見す。僕乃ち其の儀仗を常磐門外に縦観することを得たり。鼓吹の楽、章服の観、人をして起敬せしむ。今夫れ中華久しく已に覺羅満と為る。弁髪左衽にして、文物章服、復た見る可からず。朝鮮、<sup>さいじ</sup>蕞爾たりと雖も、能く明代の制を守りて、変ぜられず。古人、礼儀の邦と称するは、良に誣いざるのみ。国小なること無くんば、嘉尚せざる可けんや。吾が儕、太平の代に生まれ、遠人聘を脩するの日に逢いて、親しく華風を見ることを得たるは、幸と謂う可きなり。但だ自ら顧みて形の穢きを覚ゆ。而して覲たる面目有り。人を視ること、極むこと罔し。赫赫たる吾が邦文化<sup>みくにく</sup>丕いに闡くを以てして、此の大闢典有り。君子、焉んぞ之れが為に長大息せざることを得んや。独り喜ぶ、吾が邦当今、人文の盛んなる、家々隋侯を蔵し、人々靈蛇を握る。中華古の盛代と雖も、殆ど以て過ぐる無きか。此れ以て吾が邦、気を吐くに足れり。吾の朝鮮に於ける、昔は武を以て争う。今は文を以て争う。文と武と、皆な彼をして膽落ち氣<sup>うば</sup>褫われ、甲を棄て兵を曳き、畜に三舍を避くるのみならざらしむ。豈に愉快ならざらんや。不佞も亦た自ら量らず、一たび客と館中に周旋して、薄技を試みんと欲す。独り藩邸の三尺出入に限り有るを奈ん。未だ往会するに及ばずして、使輶已に都を發せり。 （『襄園集』後・十一）

この書簡の宛先、種元民は近江の儒者、種村箕山（1722～1800）である。「覺羅満」は清の頭祖の傍支子孫をいう。「弁髪左衽」は清朝の風俗。「蕞爾」は国が小さいさま。現実の「中華」がすでに「夷」に変じたいま、小なりとはいえ「明代の制」を維持しているのは「朝鮮」のみ。古来「礼儀の邦」として称賛されてきたのも故なしとしない。それを実際に目にするのできる「太平の代」に感謝しつつも、「華風」に触れて否応なく気付かされるのは、我が身の「形の穢」さである。「覲たる面目有り」とは『詩経』小雅何人斯篇によって、人らしい面目をもっているということ。それに「吾が邦文化丕いに闡」け、「人文の盛ん」な当代になお

「大闕典」欠けている点はあるものの、「武」ではなく「文」で競い合うのは「愉快」なことにちがいない。「隋侯...靈蛇」は隋侯に助けられた大蛇がお礼にくわえてきた宝玉（『莊子』讓王）。ただ残念なのは、自由に「周旋」することができない点である。「使輶」使節が乗る車。

大氏列国諸侯の聘使を待つや、其の儒臣に命じて客館に接伴せしむ。独り我が藩は則ち否<sup>しから</sup>ず。客をして城中唯だ齷齪たる武夫のみにして、一人の字を知る者有ること無しと謂わしむるに至る。夫れ以<sup>おも</sup>に海内文風隆盛なり。而るに我れ独り是くの如く其れ陋なり。甚だしいかな、有司の不学なることや。知らず、足下及び二三君子、帑<sup>きはい</sup>旆を要して一たび与に相当たることを得たるや否や。果たして然らば則ち以て前日の恥を解く可し。不佞日に領を引きて捷音の至るを望む。（同上）

「領を引く」とは首を伸ばして待ち望むさま。「捷音」は速報。

そこで「木本君錫に与う」によって東皐の考えを見ておこう。そこでは「中華を尊びて我が日本を賤しむるは、今の学者の蔽なり」という相手の記述を引いて、次のように批判している。

近世儒者の論、往往にして此の如き者有り。此れ道を知らざる者の言のみ。足下亦た言わずや、国に道有れば、則ち夷猶お華のごときなり。国に道無ければ、則ち華猶お夷のごとしと。是れ夷と華と、之れを道に属して、之れを域に属せざるなり。此れ固より公論なり。夫れ道は、礼楽文物の謂なり。古え、呉楚を黜<sup>しりぞ</sup>けて以て夷蛮と為す。後世、礼楽闡<sup>ひら</sup>け、文物行わるれば、則ち混一して華と為る。伊川は中土なり。髪を被<sup>こうむ</sup>りて野に祭れば、則ち辛有其れ戎と為らんことを知れり。中華の貴き所以の者は、礼楽文物の盛んなるを以てなり。其れ或いは惡風醜俗有るも、亦た猶お君子の過のごときなり。故に過を視て斯に仁を知るなり。夷狄の賤しき所以の者は、礼楽文物の行われざるを以てなり。其れ或いは善風良俗有るも、亦た十室の邑にも必ず忠信有るがごときなり。而れども聖人の学を好むに如かず。聖人学を好みて、郷人為らんことを欲せず。学は道を学ぶなり。道は之れを文と謂う。礼楽の謂なり。子、九夷に居らんと欲す。曰く、君子之れに居れば、何ぞ陋なること之れ有らんや。陋とは文無きの謂なり。夷も亦た人のみ。礼楽の教、安くに適くとして化を施す可からざらんや。故に孔子然云うなり。（同上、十二）

ここで東皐が「国に道有れば」というときの「道」は「礼楽文物」を指している。

「髪を被りて野に祭」とは、夷狄の振る舞いのこと。「辛有」は周の大夫（岩波文庫『春秋左氏伝』（上）248頁を参照）。「中華の貴き所以」は「礼楽文物の盛んなる」ためである。したがってたとえ「悪風醜俗」があったとしても、それは「君子の過」のようなもので、取るに足りないとして無視される。大事なものはその「礼楽」を学ぶことである。これは『弁道』17に徂徠が「古者は道これを文と謂う。礼楽の謂なり。物相雑るを文と曰う」と記した条に基づいている。「過を視て斯に仁を知る」は、『論語』里仁篇に「人の過つや、各おの其の党に於いてす。過ちを觀て斯に仁を知る」とあるのに拠る。「十室の邑にも必ず忠信有るがごとき」も、同じく『論語』公冶長篇の「十室の邑、必ず忠信、丘が如き者あらん。丘の学を好むに如かざるなり」に拠る。

そこで日本の場合には次のようになる。

我が先王に在りては、隋唐に取りて礼楽を制作す。郁郁として文なるかな。将んど華なり。保平以降、風俗頽廢し、元建而後、日に干戈を尋ゆ。是に於いて礼楽地を掃い、鞫まりて夷俗と為る。吁、悲しむ可きかな。昭代、文を右ぶの化、先王に於いて光有り。然れども礼楽未だ興らず、文物未だ盛んならず、戦国の習い未だ祛かずして、夷俗の陋依然たり。是の時に当たり、古を学ぶの徒、苟も志有る者は、必ず礼楽を主張し、文風を称揚し、務めて夏を用いて夷を変ずるの道を唱えて、以て後進を誘率す。則ち之れを当時に行うこと能わずと雖も、焉くんぞ来者の聞きて興ること有らざることを知らんや。是れ学者の志のみ。（同上）

この条は面会の叶わなかった通信使、わけても冒頭に引いた副使書記元仲挙に聞かせたい言葉である。だが、この時期にこの延長線上での文明化は困難と言わざるを得ない。「近代」が目前に迫っていたからである。

## 6

奇しくもこのあと、江戸で通信使と交流のあった宮瀬竜門（1719～71）も一行に向かって、「欧邏巴部」の「和蘭」のことを次のように伝えていた。

其の人、長身白皙、紅毛藍瞳象鼻、毛布を以て服と為し、<sup>とうしゅうさくさん</sup> 箆袖窄衫、<sup>ひく</sup> 氈笠皮屨、余曾て之れを見る。形様情態、此の方の人に類せざるなり。貴邦、此の人至るや否や。（『東槎余談』上）

「箆袖窄衫」は筒袖の単衣の着物、洋服のこと。「氈笠皮屨」はフェルトの帽子と皮靴。このときの相手は正使伴人の趙東觀（号花山）だったが、「此くの如き人物、

但だ見ざるのみならず、曾て未だ聞かざる所なり」といい、さらに異聞の為に携え帰りて、之れを録さん」といって、「華山、余が書く所を剪りて、之れを囊中に蔵」めたという。竜門は改めて「其の形様を画きて之れを贈」っている。またその国の情報として「水路三万里」を航海するほど「操船」に長け、「三百余国」と「貨物を交易」し、「天を崇び、蓋し其の道、別に建つる所有り」、そして「左行横に之れを書す蕃書、読む可からず」でありながら、「諸什器を製すること、皆な精巧。鳥銃、火縄を用いず、機発して火を出だす者有り。又た天文地理に精しと云う」と解説し、その範囲は「其の人米飯を食さず、唯だ麦餅獸肉牛乳を喫するのみ」（同上）という食生活にまで及んでいた。ここには異文化に対する偏見はない。一般化はできないものの、鶴台の「和蘭」賛美とともに、注目に値する開かれた態度といえるだろう。

このような見聞を通信使一行がどう受け止め、それをどのような形で活用したか、今後なお検討すべき問題は少なくない。<sup>4</sup>

---

<sup>4</sup> さしあたっては拙稿「東アジアの半月弧—浪華・ソウル・北京—」（『啓蒙と東アジア』18 世紀科学研究会編、2010 年）を参照されたい。